

# 基礎配筋検査

実施日	2022-09-19	
登録物件名	甲府市国玉町 A様邸	
事業者名	デザインハウス甲府	
事業者立合者	梅屋 大樹	
報告者	梅屋 大樹	
総合判定	適合	

【凡例】「方法」欄 A:目視確認 B:計測確認 C:書類確認（設計図書含む）

「判定」欄 ○:適 ×:不適 ー:該当なし（登録設計図書に記載がない場合を含む） 保留:判定保留

※目視・計測可能な部位で抽出確認し、保険の適否を判定します。

## 1.書類

No.	項目	基準値	実測値	方法	判断
1-1	基礎配筋検査用の必要書類			C	○

【備考】 1-1.基礎伏図・基礎断面図

## 2.基礎 配筋

No.	項目	基準値	実測値	方法	判断
2-1	床下防湿措置 防湿フィルムに破れはないか（シートの破れがあった場合は、防水テープまたは機密テープで補修する）			A	○
2-2	防湿フィルムの重ね幅は最低でも 150mm以上とし、防湿フィルムの全面を乾燥した砂、砂利又はコンクリート押さえとする。	150mm	160mm	B	○
2-3	鉄筋の継手、定着は40d以上とする。参考：D13の場合 520mm D16の場合 640mm 同じ通りで継がないように、継ぎ手箇所を乱にする。ベース筋の継手は同列に並ばないように注意する。	40d	520d	B	○
2-4	人通口の幅600mm以下か	600mm	600mm	B	○
2-5	人通口等の立上りの端部となる部分には、途切れた主筋の補強を入れる。			A	○

2-6	人通口等の端部、上端筋のD16を2本、下端筋のD16を1本、計3本切断している場合はそれぞれに定着筋を入れる。			A	○
2-7	サイコロ（スペンサーブロック）間隔が縦横1m以内か	100cm	100cm	B	○
2-8	底盤鉄筋サイコロ（スペンサーブロック）をいかり厚さ60mm以上か	60mm	60mm	B	○
2-9	立ち上がりのスターラップはD10を使用する。上部は180度のフックを設け、フックを捻る形で固定する。			A	○
2-10	基礎立ち上り部分の鉄筋かぶり厚は40mm以上か	40mm	40mm	B	○
2-11	基礎立ち上り部分の鉄筋で、土に接する部分のかぶり厚は60mm以上か	60mm	60mm	B	○
2-12	立ち上りのスターラップ設置位置は200mm間隔で設置する。 ※端部や梁の交点に来る場合は梁の勝ち負けにより設置位置を調整する。	200mm	200mm	B	○
2-13	鉄筋が重なりすぎていないか確認する。3本以上は不可。			A	○
2-14	スリーブ管周辺の切断した主筋と同径の鉄筋を追加し、端部から補強筋の定着長さを40d以上確保する。	40d	520d	B	○
2-15	配管周囲（各スリーブ）の鉄筋との間隔は30mm以上確保する。	30mm	30mm	B	○
2-16	打ち継ぎ部にジャンカ、空洞及び亀裂等が発生していないか確認する。			A	○
2-17	基礎立ち上りの高さ400mm以上か確認する。	400mm	540mm	B	○
2-18	基礎立ち上りの幅150mm以上か確認する。	150mm	150mm	B	○
2-19	基礎工事完了後（脱枠後）対角寸法は誤差±10mmまでにする。	10mm	2mm	B	○

【備考】

特記事項

--

1-1 基礎配筋検査用の必要書類(1/2)

備考



1-1 基礎配筋検査用の必要書類(2/2)

備考





2-1 床下防湿措置 防湿フィルムに破れはないか (シートの破れがあった場合は、防水テープまたは機密テープで補修する)(1/2)

備考



2-1 床下防湿措置 防湿フィルムに破れはないか (シートの破れがあった場合は、防水テープまたは機密テープで補修する)(2/2)

備考





2-2 防湿フィルムの重ね幅は最低でも 150mm以上とし、防湿フィルムの全面を乾燥した砂、砂利又はコンクリート押さえとする。

備考



2-3 鉄筋の継手、定着は40d以上とする。参考：D13の場合 520mm  
D16の場合 640mm 同じ通りで継がないように、継ぎ手箇所を乱にする。ベース筋の継手は同列に並ばないように注意する。(1/2)

備考



基準値  
40 d 以上  
実測値

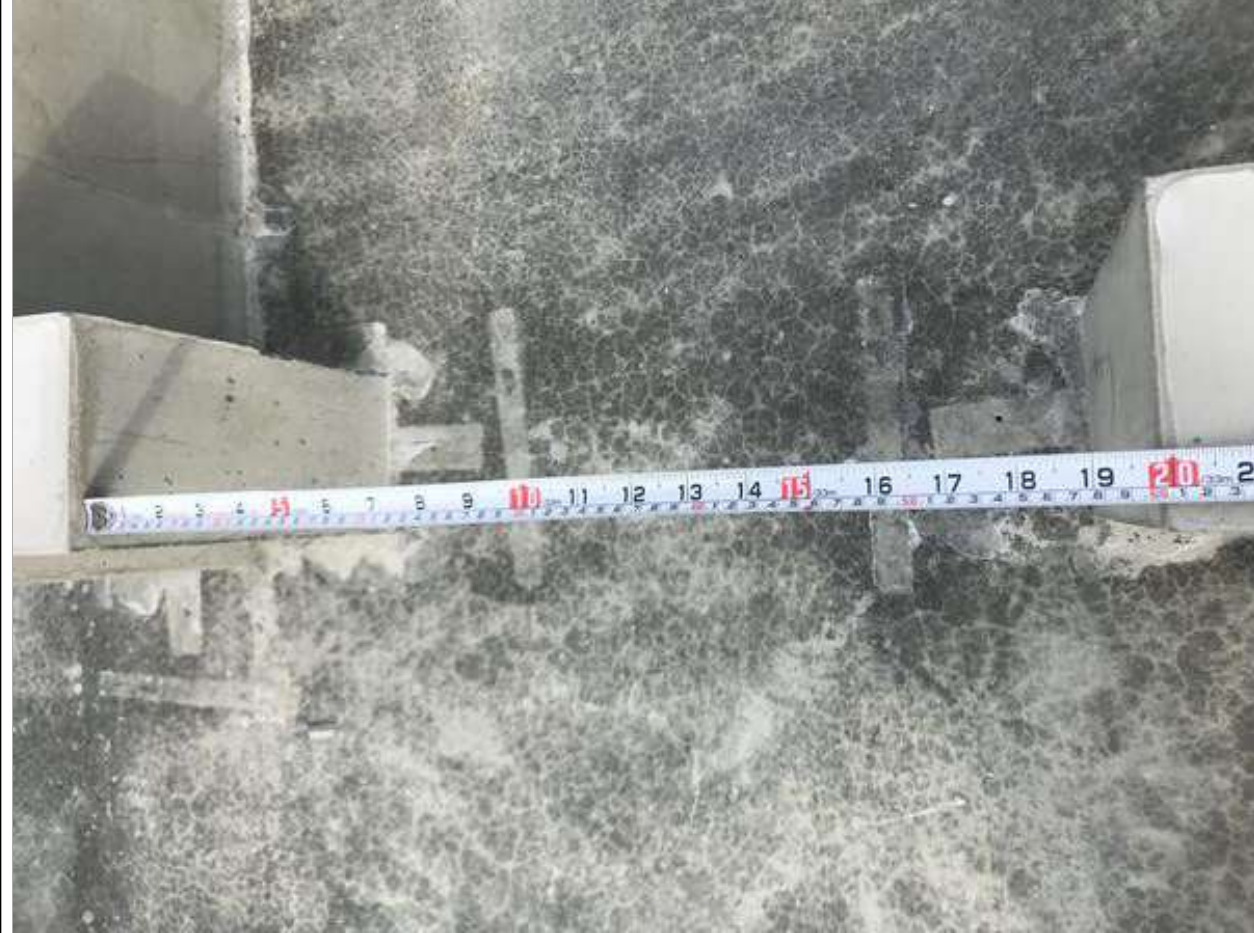


<p>2-3 鉄筋の継手、定着は40d以上とする。参考：D13の場合 520mm D16の場合 640mm 同じ通りで継がないように、継ぎ手箇所を乱にする。ベース筋の継手は同列に並ばないように注意する。(2/2)</p>	<p>備考</p>
--	-----------



<p>基準値 40 d 以上 実測値</p>
--------------------------------

<p>2-4 人通口の幅600mm以下か</p>	<p>備考</p>
--------------------------	-----------



<p>基準値 60mm以上 実測値</p>
-------------------------------



2-5 人通口等の立上りの端部となる部分には、途切れた主筋の補強を入れる。

備考



基準値  
縦横1m以内  
実測値

2-6 人通口等の端部、上端筋のD16を2本、下端筋のD16を1本、計3本切断している場合はそれぞれに定着筋を入れる。(1/2)

備考





2-6 人通口等の端部、上端筋のD16を2本、下端筋のD16を1本、計3本  
切断している場合はそれぞれに定着筋を入れる。(2/2)

備考




2-7 サイコロ（スペンサーブロック）間隔が縦横1m以内か

備考





<p>2-8 底盤鉄筋サイコロ（スペンサーブロック）をいかり厚さ60mm以上か(1/2)</p>	<p>備考</p>
 <p>A photograph showing a grid of steel reinforcement bars (rebar) on a concrete slab. A yellow spacer block is placed between two parallel rebar bars. A white tape measure is held across the spacer block to measure its thickness. The concrete surface is grey and textured.</p>	<p>基準値 40d以上 実測値</p>
<p>2-8 底盤鉄筋サイコロ（スペンサーブロック）をいかり厚さ60mm以上か(2/2)</p>	<p>備考</p>
 <p>A second photograph, similar to the first, showing the same rebar grid and spacer block setup. The tape measure is positioned to measure the thickness of the spacer block. The perspective is slightly different, showing more of the rebar grid.</p>	<p>基準値 40d以上 実測値</p>



2-9 立ち上がりのスターラップはD10を使用する。上部は180度のフックを設け、フックを捻る形で固定する。

備考



2-10 基礎立上り部分の鉄筋かぶり厚は40mm以上か

備考



基準値  
±10mm  
実測値



2-11 基礎立上り部分の鉄筋で、土に接する部分のかぶり厚は60mm以上か

備考



基準値  
40 d 以上  
実測値

2-13 鉄筋が重なりすぎているか確認する。3本以上は不可。(1/2)

備考





2-13 鉄筋が重なりすぎているか確認する。3本以上は不可。(2/2)

備考



2-15 配管周囲（各スリーブ）の鉄筋との間隔は30mm以上確保する。(1/2)

備考



基準値  
30  
実測値



2-15 配管周囲（各スリーブ）の鉄筋との間隔は30mm以上確保する。(2/2)

備考



基準値  
30  
実測値

2-16 打ち継ぎ部にジャンカ、空洞及び亀裂等が発生していないか確認する。

備考



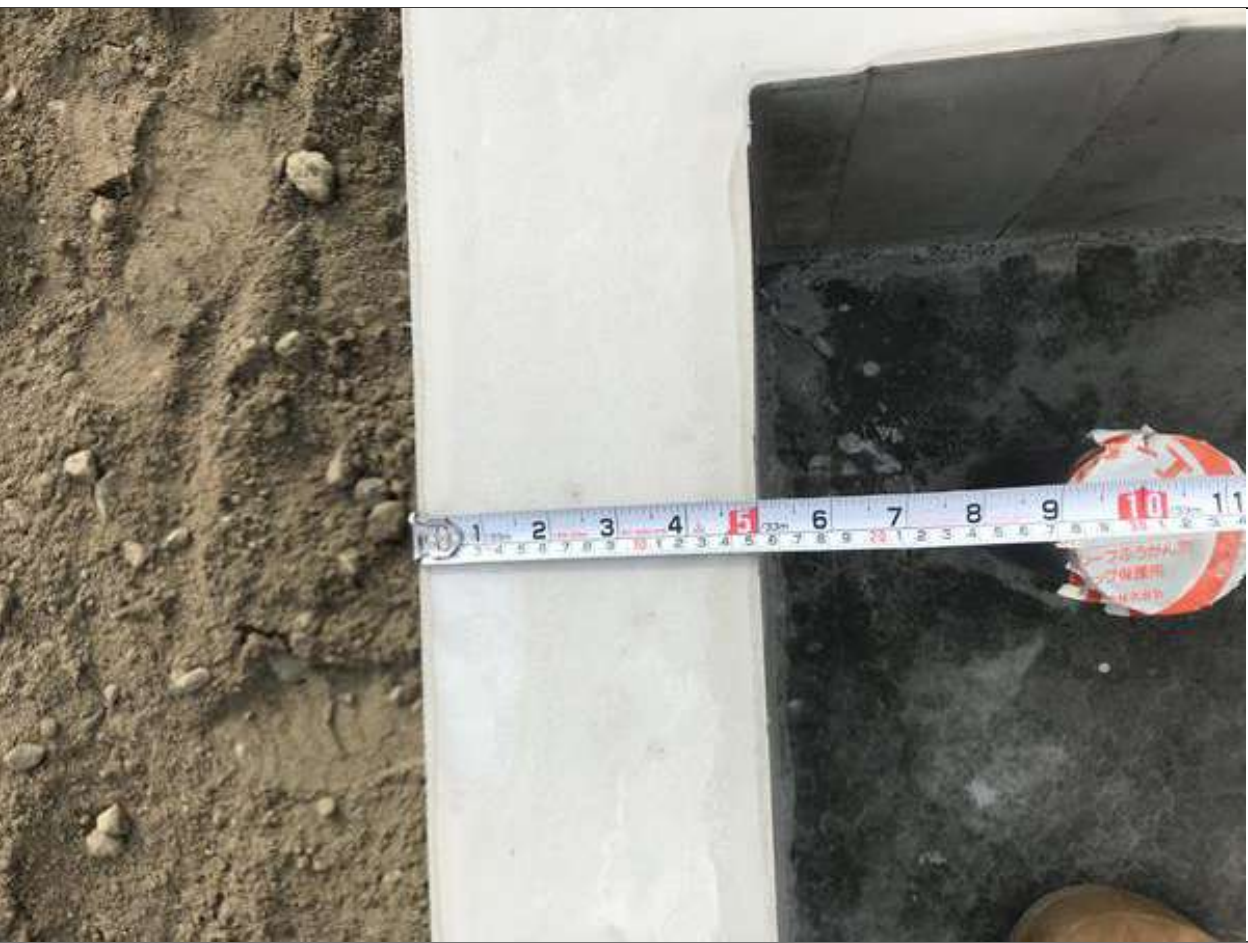
2-17 基礎立ち上りの高さ400mm以上か確認する。

備考



2-18 基礎立ち上りの幅150mm以上か確認する。

備考



基準値  
150  
実測値